

新 刊 紹 介

西洋占星術 荒木俊馬著 A5判, 176頁, 700円,
恒星社厚生閣発行。

占星術 中山茂著 紀伊国屋新書, 新書判, 195頁
250円, 紀伊国屋書店発行。

私は占星術について、かねがね一つの疑問をもって来た。これは中世天文学が占星術というわき道にそれた時代が、ずいぶん長期間にわたったが、時代の知識人をして、そのように盲目にさせた背後の原動力は何であったか、またそれに関連して、現在吾々が真理に近づく道であり、人間の進歩の方向であると信じ、かつ行動していることが、或はこの占星術に見るとき、とんでもないわき道にふみこんでいるようなことが、あるのではないか。またそのような過誤を見さだめる道が、占星術の歴史の中に秘められてはいないか……という点である。

最近占星術について、上記二書が相ついで出版されたので、私はこのような疑問と期待とをもって通読した。

荒木氏の著書の構成は、緒論、神話伝説と占星術の起源、ギリシャ・ローマ時代の占星術、ホロスコープ占星術、コペルニクス転向以後の有名人と占星術といった5部に分け、占星術が古代の人類の間にどのようにして発生し、形成されて近代にいたったかを、神話、伝説、文学作品を織り混ぜながら、くわしくその経過をたどっている。著者は結びの中で、占星術は天文学史の研究にすることができない故にしらべたと述べているが、これは天文学を専攻した著者としては当然なことであるが、その点では中山茂氏の立場も同じであるが、特に荒木氏にあっては人間の精神の進化の過程の上に、いかにして占星術が芽ばえ、座をしめていったかという、人間の精神史の点でも著者の興味が動いているように見うけられた。いずれにしても、この書は占星術を西洋のそれに限ってはあがあるが、構文は歴史的な流れを追って、きわめて系統的に展開されて、要をつくしている。

中山氏の著書は、占星術の特に中世近世への展開を、科学史の側から取扱かうという意図をもって編まれたも

ので、そのために氏の史観に照らして、占星術というものを分類し、図式枠組みを前提しておいて、それに史料をちりばめていくという行き方をとっている。

全体としての構成は、初めの2章で占星術を天下國家のための占星術と、個人のための占星術とに大別し、ほぼ歴史的な発生展開にしたがって、その内容性格を述べ、ついで日本の占星術と、天文気象医学などの諸科学と占星術との関連について、それぞれ一章を割いている。

占星術の発生動機としては、経験から天体と社会あるいは人間の運命との因果関係を導き出そうという、一応は合理主義から出発したのだが、その経験の解析と演繹の途上に飛躍と、独断、こじつけが入りこんだために、科学から足をふみはずした、というのが著者の見方である。占星術の発生、流布とその性格、その科学史上における位置等を一通り知るには手頃な書である。

いずれにしても天文学の周辺にあって、古来社会と人生とのかかわりの密接であったこの命題について、ここに天文学の側からそれぞれ特色をもった二著を得たことは喜ばしいことで、両者ともに興味ある話題も数多く織りまぜてあり、会員諸氏の一読をおすすめする。はじめに誌した私の疑問についても、読者それぞれに解答が得られることと思う。

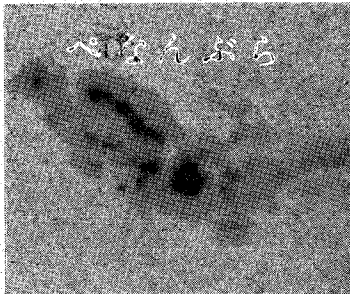
(下保 茂)

新刊天文関係書案内

- ◇これが宇宙だ！ 解説；古田昭作，天体画；岩崎敏二，B5判，40頁，750円，童心社発行——ポーンステルを思わせる美しい天体画集である。
- ◇宇宙にも生命は存在する（宇宙生物学の父、チーホフの自伝）G・A・チーホフ著，堀秀道訳，新書判，247頁，260円，学習研究社発行——原書名は“望遠鏡とともに60年”
- ◇はじめての天体観測——望遠鏡なしの観測・小望遠鏡での観測。鈴木敬信著，誠文堂新光社発行，B6判，190頁，400円
- ◇宇宙（ライフ・ネーチャ・ライブラリー）バーガミニ解説，畑中武夫訳，27×21cm判，197頁，1500円，時事通信社発行。

☆会員の動き 水路部編暦課長であった宮原宣氏は3月31日附で退職され、日大文理学部教授となられた。また進士見氏は水路部編暦課長に、大脇直明氏は水路部海洋研究室長となられた。

国土地理院の測地第2課長北野芳徳氏、北郷俊郎氏ら4名の一行は、外務省海外技術協力団の基金により、クエートとサウジアラビアの国



境画定作業のうち、原点観測を行うために、5月24日に現地にむけてルフトハンザで出発された。

☆堂平の大気光極望遠鏡観測室の完成 東京天文台堂平観測所の大気光極望遠鏡観測室は、去る3月末に建物が完成した。大気光観測はすでに一部が開始されており、極望遠鏡は目下器械設備を整備中である。